

1 単元名 「老上中防災教育 *Oikami Bousai Education* (OBE)」—みんなで創る安全・安心なまち *OIKAMI*—

## 2 単元の目標

- 地域人材や地域資源を通して、防災について知識を獲得し、その内容をより多くの人に伝えることができるようレポートにまとめることができる。 (知識・技能)
- 関係者のお話や自分で調べたことをもとに、疑問に感じたこと、新たな気づきから課題を見つけ、より多くの人に防災の重要性を知ってもらうための方策を考えたり、多くの人に伝えたりすることができる。 (思考・判断・表現)
- より多くの人に防災の大切さを知ってもらいたいという目的意識をもち、よりよい方法を見つけるうえで、他者と協働したり、他者の意見や考えを受け入れたり、反論したりすることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

## 3 単元について

## (1) 教材観

本教材は、「私たちが住む老上中学区を、みんなで協力して安全・安心なまちにするには、どうしたらよいだろうか」という問いを核に据え、南海トラフ巨大地震の発生を想定したうえで、地域の安全を自分事として捉える力を育むことをめざす。老上中学区は琵琶湖に近く、豊かな自然環境に恵まれている一方、地震等が起こった場合の土砂災害や川の氾濫等のリスクを抱えており、災害時における地域の対応力や連携の重要性が問われる地域でもある。

本教材では、「自分と大切な人の命を守る」という防災学習の根幹となるコンセプトをもとに、生徒が災害時にどのような行動をとるべきか、どのような備えが必要かを具体的に考える力を育てる。地域の防災マップ、ハザードマップ、過去の災害事例、行政の防災計画等を活用し、実際の避難行動や情報伝達の方法を体験的に学ぶとともに中学生版防災マップを作成することで、防災を「自分たちの暮らしを守るための意識」として捉える姿勢を養う。

また、地域住民、防災の専門家、大学の防災サークルの学生等との交流や避難所体験を通して、実際の取組や課題に触れ、協働的な防災の在り方を考える学びを展開する。生徒が自らの言葉で地域の安全について発信したり、仲間と協力して防災アイデアを形にしたりする活動を通して、地域への関心と責任感を高めるとともに、将来にわたって安心・安全なまちづくりに貢献しようとする態度の育成につなげていく。

## (2) 生徒観

本学年の生徒は、日常の学習や学校行事を通して、仲間と協力しながら課題に取り組む姿勢が育まれており、自分の考えを持ち、他者と共有しながらよりよい方向を模索する力を身につけていく。また、小学校段階からESDの視点による地域学習に継続して取り組んできた経験があり、地域の課題を「自分事」として捉え、持続可能な社会創りに向けて主体的に行動しようとする素地が備わっている。

今回の防災学習では、「私たちが住む老上中学区を、みんなで協力して安全・安心なまちにするには、どうしたらよいだろうか?」という問いをもとに、南海トラフ巨大地震の発生を想定した学習を行う。生徒は、地域の防災に関する情報を収集・整理し、避難経路や防災設備の確認、地域の人々との交流、防災マップ作製、避難所体験等を通して、「自分と大切な人の命を守る」ために必要な行動や備えについて考えることができる。

また、生徒が実際に被災した場合、避難所で周囲からのサポートを受ける立場になるのか、あるいは自分より年下の子どもや高齢者他サポートを必要とする人たちの存在に気づき、主体的に支える立場として関わることができるのか、その意識は防災に係る学習によって大きく変わってくると考えられる。自他の命を守るだけでなく、「地域の一員として何ができるか」を見つめ、状況に応じて他者を支える主体者として行動しようとする姿勢を育てていきたい。

これらの学習を通して、生徒は自分たちの暮らす地域への理解を深めるとともに、地域の一員としての責任や役割を自覚するようになる。防災というテーマに取り組む中で、命の大切さや人とのつながりの重要性を実感し、郷土への誇りや愛着を育みながら、将来にわたって地域社会に貢献しようとする態度の育成につながると考える。

## (3) 指導観

本単元では、「私たちが住む老上中学区を、みんなで協力して安全・安心なまちにするには、どうしたらよいだろうか?」という問いを中心に据え、生徒が地域の防災について主体的に考え、行動する力を育むことをめざしている。指導にあたっては、まず地域の特徴や生活環境に目を向けさせ、地震災害が自分たちの暮らしにどのような影響を及ぼすかを実感させる。南海トラフ巨大地震の発生を想定し、地域の防災体制や避難経路、過去の災害事例等を調べることで、災害を「自分事」として捉える姿勢を育てる。

学習活動では、グループでの現地調査(フィールドワーク)や地域の防災活動に関わる方々、市の危機管理課職員、大型商業施設(ショッピングモール)のオペレーション担当の方による講話を通して、地域の防災課題に気づき、その解決に向けたアイデアを出し合う。さらに、防災を学ぶ大学生サークルとの交流を通して、年齢の近い立場からの実践的な知識や経験に触れ、災害時の心構えや創意工夫の大切さについて理解を深める。

加えて、自衛隊の協力を得る中で、災害時に役立つロープワークの実習、救急対応の体験、災害派遣時に使用する車両への乗車体験等を行う。専門家から直接学ぶこれらの活動は、生徒に「命を守るための技能」を身につける機会となり、また災害現場での判断力や落ち着いた行動の重要性を実感する貴重な学びとなる。

その後、これまでの学びをもとに、中学生版防災マップ兼ハザードマップの制作や避難所体験、防災啓発ポスターの作成等の活動に取り組む。避難所体験では、地域住民と協力しながら避難スペースの設営や物資の仕分け、情報伝達の方法等を実践し、災害時における協働の重要性を体験的に理解する。

社会科では地域の地形や人口分布、理科では地震のメカニズムや災害の影響について学習し、技術科や美術科では段ボールを活用した防災グッズの製作やポスター制作に取り組むなど、教科往還的な視点から防災を多面的に捉える力を養う。また、別の総合的な学習の時間(以下、総合学習)で行う「障がい者理解」に関する学習とも関連付けることで、災害時における多様な立場の人々への配慮や支援のあり方についても考えを深めていく。

防災学習を通して、地域への関心と郷土愛を育み、生徒が「自分たちのまちを守る一員」としての自覚を高め、将来にわたって地域社会に主体的に貢献しようとする態度の育成につなげていくとともに、生徒は情報を整理し、他者に分かりやすく伝える力を育てるとともに、協働的な学びの中でコミュニケーション力や表現力の向上を図る。

#### (4) ESD との関連

##### 本学習で働かせる ESD の視点 (見方・考え方)

- ・ 相互性：地域の様々な人々や組織がつながり、連携して防災に取り組む。
- ・ 公平性：世代内だけでなく世代間を超えて安全・安心な地域を次世代に引き継ぐ。
- ・ 連携性：中学生、大学生、地域住民、行政が協働する。
- ・ 責任性：地域の一員として防災に責任を持ち、継続的に取り組む。

##### 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・ 多面的・総合的に考える力 (システムズ・シンキング)  
地域の人たちが協力して防災に取り組むことは、自分たちも地域から大切にされている存在だと考えることができる。
- ・ 他者と協力する態度  
「自分がどうせやっても」と思わず、多くの人を巻き込みながら行動することができる。
- ・ 進んで参加する態度  
自分がよいと思った防災活動は積極的に行動にうつすことができる。

##### 本学習で変容を促す ESD の価値観

- ・ 世代間の公正  
安全・安心な地域環境は、次の世代へ引き継いでいく責任が今の時代を生きる私たちにはある。
- ・ 世代内の公正  
安全・安心で住みやすい地域社会を、みんなが協力して開発していく必要がある。

##### 達成が期待される SDGs

目標 11 住み続けられるまちづくりを

目標 13 気候変動に具体的な対策を

#### 4 単元の評価規準

(7) 知識及び技能	(イ) 思考力・判断力・表現力等	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
①防災に係る様々な知識について理解している。 ②学んだり、調べたりして獲得した知識を、言葉や図、絵等を用いて、それらを関係づけながらまとめる技能を身につけている。	①実習、講話、資料をもとに課題を見だし、防災の重要性を広げるための方策を考えている。 ②防災について学んだことや考えたことをもとに、防災ポスターや中学生版防災マップを作成している。	①多くの人に防災の大切さを知ってもらいたいという目的意識を持ち、意欲的に活動に参加しようとしている。 ②防災活動・業務に係る様々な方々との交流から、防災の必要性やこれからの課題等に触れ、「自分たちのまちは自分たちで守る」意識を高め、将来にわたって地域社会に貢献しようとしている。 ③防災について学んだことを通して、交流・発信しようとしている。

5 単元の指導計画（全14時間）

学習活動	○学習への支援	評価備考
<p>1、防災の必要性を認識するとともに、今後の学習の見通しを持ち、防災を自分事として捉える意識を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分と大切な人の命を守る」ために、どのような備えが必要かを考え、防災バックに入れるものについて話し合う。</li> <li>・地域のハザードマップをもとに、地形や避難所の位置、危険箇所等、見て取れる情報について話し合い、地域の防災課題を分析する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○南海トラフ巨大地震が発生した場合の政府想定被害を知り、災害が自分たちの生活に深く関わることを実感させる。</li> <li>○「自分と大切な人の命を守る」ために、どのような備えが必要かを考える場面では、身近な生活用品や家族との会話を通して、具体的なイメージを持たせる。</li> <li>○地域のハザードマップを活用しながら、地形や避難所の位置、危険箇所等を読み取る力を育てるとともに、地域の防災に関心をもたせる。</li> </ul>	<p>イ① (思判評)</p> <p>2時間</p>
<p>2、私たちの地域には、どのような防災の課題があるかを「知る」「調べる」。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域まちづくり協議会の防災担当者から、地域の高齢化の現状や過去の災害経験、地域防災訓練の内容、住民の防災意識等について話を聞き、地域の実情を知る。</li> <li>・市危機管理課職員から、地域災害のリスクや消防署の活動、家庭でできる防災対策、中学生に期待される役割等について学び、防災の専門的な視点を得る。</li> <li>・校区にある大型商業施設オペレーション担当者から、ショッピングモールにおける防災体制、避難誘導の手順、多様な来館者への安全配慮、災害発生時の判断や運営対応など、現場の視点から防災を学ぶ。</li> <li>・実際に地域を歩いて調査を行い、危険箇所や避難経路、防災設備等を確認したり、気づいたりすることで、地域の防災課題を自分たちの目で捉える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域の高齢化や過去の災害経験、現在の防災活動等を知ることで、地域の防災課題を身近なものとして捉えさせる。</li> <li>○災害のリスクや家庭でできる備え、中学生に期待される役割等を理解し、防災への主体的な関心を高めさせる。</li> <li>○大人数を収容する商業施設ならではの防災課題を地域防災の視点に結び付けて自身の考えを深められるよう支援する。</li> <li>○実際に地域を歩いて調査する活動では、危険箇所や避難経路、防災設備等を自分の目で確認することで、地域の安全に対する意識を高める。</li> <li>○「どうしたら地域の防災力を高めることができるか」「中学生として何ができるか」という問いを持たせ、今後の学習への意欲につなげる。</li> </ul>	<p>ア① (知・技)</p> <p>イ① (思判評)</p> <p>3時間</p>
<p>3、自衛隊との協力を通して、災害時に必要な技能や判断力を身につける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時に役立つロープワークの実習を行い、命を守るための基本的技能を習得する。</li> <li>・救急対応の体験を通して、応急処置の重要性や迅速な判断の必要性を理解する。</li> <li>・災害派遣時に使用する車両への乗車体験を行い、救助活動の現場で求められる行動や安全確保の視点を学ぶ。</li> <li>・専門家から直接指導を受けることで、災害時の落ち着いた行動の大切さや、正しい判断が命に関わることを実感し、防災への意識を高める。</li> </ul> <p>4、防災について学んでいる大学サークルの学生たちとの交流を通して、さらに学びを深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日頃から大切にしておきたい心構えや、もしもの時に役立つアイデア、防災学習の意義等に</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自衛隊の専門的な知識技能に触れることで防災を「自分の命を守る具体的な行動」として捉えさせ、学習意欲を高めさせる。</li> <li>○ロープワークや救急対応の実習では、自衛隊員が丁寧に補助しながら指導することで、生徒が安心して挑戦し、技能を確実に身につけられるよう支援する。</li> <li>○乗車体験では、実際の活動の様子や装備の役割をわかりやすく説明してもらうことで、生徒の理解を深め、災害現場をリアルにイメージできるようにする。</li> <li>○体験を通して「落ち着いて行動することの大切さ」や「正しい判断が命に直結すること」に気づかせ、自分に必要な備えや心構えについて主体的に考えられるよう促す。</li> </ul> <p>○防災を学ぶ大学生との交流を通して、年齢の近い立場からの実践的な知識や経験に触れ、防災をより身近なものとして捉えさせる。</p>	<p>ア① (知・技)</p> <p>イ① (思判評)</p> <p>ウ② (主体的)</p> <p>4時間</p>

<p>ついて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「こんな時どうする？」というシミュレーションを通して、災害時の判断力や対応力を養う。</li> <li>・身近な材料を使って防災グッズを作成し、災害時の創意工夫の重要性や、家庭にある物の活用方法について理解を深める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○話し合いやシミュレーション活動では、大学生がファシリテーターとなることで、生徒が安心して意見を出し合い、主体的に考える場をつくる。</li> <li>○防災グッズづくりでは、身近な材料を使うことで、災害時の工夫の大切さや、家庭にある物の活用方法に気づかせる。</li> <li>○「自分にできることは何か」「中学生としてどんな備えができるか」という問いを持たせ、今後の学習への意欲につなげる。</li> </ul>	
<p>5、学んだことを行動につなげていく。</p> <p>【体育館において避難所体験の実施】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域住民の方々、大学サークルの学生たちと協力し、これまでの学習成果をもとに中学生にできることに取り組む。</li> <li>・避難所体験では、避難スペースの設営、物資の仕分け、情報伝達の方法、避難者への声かけ等、実際の避難所運営を想定した活動を行う。</li> <li>・役割分担やシミュレーションを通して、災害時における協力の大切さや、地域の一員としての責任を実感する。</li> <li>・体験後には振り返りを行い、避難所運営における課題や改善点を話し合い、今後の防災活動への意欲につなげる。</li> </ul> <p>6、学んだことを、発信につなげていく。</p> <p>【中学生版防災マップをグループで作成と共有】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの学習や現地調査で得た情報をもとに、地域の危険箇所、避難所、避難経路、支援施設等を整理し、わかりやすくまとめる。</li> <li>・中学生の視点で、地域の人々にとって役立つ情報や工夫を盛り込み、誰もが見やすく使いやすい防災マップとなるように協力して作成する。</li> <li>・完成したマップは、地域の方々や学校内で共有し、防災意識の向上につなげる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域住民と協力して避難所体験を行うことで、実際の避難生活を具体的にイメージさせ、防災を自分事として捉えさせる。</li> <li>○避難スペースの設営や物資の仕分け、情報伝達の方法等の活動を通して、中学生にもできる役割や行動を実感させる。</li> <li>○ロールプレイやシミュレーションを取り入れ、「こんな時どうする？」という場面を考えることで、災害時の判断力や対応力を育てる。</li> <li>○体験後の振り返りでは、避難所運営の課題や改善点を話し合い、「自分たちが地域の防災力を高めるためにできることは何か」という問いを持たせる。</li> <li>○これまでの現地調査や講話、避難所体験等の学びを振り返りながら、地域の防災情報を整理することで、マップ作成の意義を実感させる。</li> <li>○中学生の視点で、誰にとっても見やすく、使いやすい防災マップとなるよう、情報の選び方や表現方法についてグループで話し合う機会を設ける。</li> <li>○「自分たちの防災マップが地域の安全につながる」という達成感を得られるよう、完成後の共有や活用のを設けることを通して、郷土愛や地域貢献の意識を高める。</li> </ul>	<p>ア①② (知・技) ウ① (主体的) ウ③ (主体的)</p> <p>2 時間</p> <p>ア② (知・技) イ② (思判評)</p> <p>2 時間</p>
<p>7、活動の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「防災」に関連する学習を来年度も引き続き取り組んでいくための新たな視点を考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「防災」について、防災とテクノロジーの関係、災害弱者への支援を考える学習、世界の防災の考え方・取組との比較学習等新たな視点へと学びをつなげていく。</li> </ul>	<p>1 時間</p>

## 6 成果と課題

本市（草津市）の重点教育施策である「スクールESD くさつプロジェクト」は、市内公立全20小中学校で本格的に推進され、今年度で2年目を迎えた。本プロジェクトは、令和7（2025）年度から施行された第4期草津市教育振興基本計画において、施策の基本方向1「こどもの生きる力を育む」の中の基本項目1『主体的に社会の形成に参画する資質・能力の育成』を具現化する中核的施策として明確に位置付けられている。特に、自ら学び、考え、他者と協働し社会のために活躍する持続可能な社会の創り手の育成と、こどもまんなか社会の実現に向け、こどもたちの主体性を尊重した学習活動の推進が強調されており、「スクールESD くさつプロジェクト」はその中心となる取組である。

本校においては、昨年度から私が校長として赴任したことを機に、学校経営管理計画にESDの視点を明確に位置づけるとともに、「地域とともにある学校」という理念を学校経営の根幹に据え、教職員と共に学校経営の方向性を共有しながら、ESDを基盤とした特色ある教育活動の構築を学校全体で推進してきた。本校の全体スローガンである「考動」と「幸動」、これら二つの「こうどう」は、生徒が主体的に様々な課題と向き合い、他者との協働を通して導かれた自らの考えのもとに活動し、その活動が自他の幸せにつながっていくという学びのプロセスを象徴している。この二つの「こうどう」を体現する生徒の姿は、まさにESDの理念に基づくものであると捉えている。

こうした理念のもと、校内研究とも連動させながら地域との協働を重視し、学年ごとに地域課題・社会課題を題材とした探究的な学びを配置し、3年生は「老上再発見プロジェクト」（地域学習）、2年生は「老上中三方よしプロジェクト ～世間よし・琵琶湖よし・みんなよし～」（環境学習）、1年生は「老上中防災教育 Oikami Bousai Education (OBE)」（防災学習）として、持続可能な地域創りと自他のウェルビーイング向上をめざした取組を系統的に実施しているところである。

校長として、そして令和5年度ESDティーチャー、令和6年度ESDマスターの認定を受けた者として、全学年の取組に継続的に関わりながら、特に1年生のプロジェクトの推進については計画段階から実践まで、該当学年の教職員と情報を共有する中で深く関与してきた。こどもたちが「地域の未来のために自ら考え（考動）、自他の幸せにつながるよう取り組む（幸動）」姿は、第4期教育振興基本計画の理念と強く呼応するものであり、学校現場におけるESD実践の価値を改めて実感している。

以下に1年生の教育活動の成果と課題について、校長としての見地およびESDマスターとしての視点から整理するとともに、次年度以降の改善と発展についてまとめた。

※現在、まだ学習に取り組んでいるところであるため、経過段階でのまとめになります。

### 【成果】

#### 生徒の視点から

○本学年の生徒は、小学校4年生の時にも防災学習に取り組んでおり、地域の安全や命を守る行動についての基礎的な知識や素地がある。今年度の防災学習「老上中防災教育(OBE)」では、その土台の上に「私たちが住む老上中学区を、みんなで協力して安全・安心なまちにするにはどうしたらよいか？」という、より主体的・探究的な問いを据えて学習を深めることができた。

○地域まちづくり協議会の防災担当者、市危機管理課、大型商業施設オペレーション担当者など、多様な立場の人の講話や交流を通して、生徒は地域の防災課題を多面的に理解し、自分たちの生活に直結する問題として捉える意識が高まった。また、実際に地域を歩き、危険箇所や避難経路を自分の目で確かめるフィールドワークを通して、教科書では知りうることができない地域特有のリスクを体感し、「自分たちのまちは自分たちで守る」という態度の育成につながった。

○自衛隊によるロープワーク実習や救急対応体験、防災車両の乗車体験等から、災害時に必要な技能や判断について、「自分の命を守るリアルな行動」として理解が進んだ。また、災害時の判断力や行動選択の重要性を学ぶとともに、創意工夫することや備えの大切さを実感することができた。

＝生徒の振り返りから＝

・フィールドワークを通して防災の視点から地域を見たとき、新しく宅地化されたところは災害対策がなされているけれど、昔からの住宅地は、道路のひび割れや古い建物も結構ありました。自分たちで制作するオリジナル防災・ハザードマップを地域の方々と共有したいです。

・今、私たちは、防災学習に取り組むことで、地域の様子を知ることができていますが、そこから更に活動を広げていく





大型商業施設内見学



地域フィールドワーク

- ・必要があると思います。地域の人たちと思いを共有して、よりよい老上中学校、老上中学区にしていきたいと思いました。
- ・これまでの学習を振り返って、みんなで協力する楽しさや大事さを改めて感じることができました。一人では難しいけれど、班活動を通して、みんなで協力することでできることがあるということに気づかされました。
- ・どこかへ行った先でも、災害時に危険になるところがないかどうかを探す意識を持とうと思います。

#### 教職員の視点から

○これまで本校の防災学習は“単発的な学習”にとどまり、継続性や発展性の面で十分とは言えなかった。しかし今年度、当該学年が総合学習においてESDの視点で3年間取り組む中心テーマを「防災」として据えたカリキュラム設計を進めたことで、総合学習における防災学習を体系的に構築していく道筋ができた。これにより、防災学習という“点”の学びが、1年生から卒業まで段階的に学びが深まる“線”の学びへと転換した。1年生では「自分と大切な人の命を守る」という防災の根幹に立ち返り、地域の防災課題を自

分事として捉える姿勢を育成した。今後は、この基礎を土台に、地域の安全づくりへの参画や発信・提言へつながら探究活動に発展させ、教職員による組織的な教材研究にも接続していくことが期待できる。本年度に築いた基盤を発展させ、“点”から“線”、さらに地域・関係機関との協働による“面”へと広がる、老上中学校らしいESDの推進を図っていきたい。

○今年度も校内研究のテーマにESDを明確に位置づけたことで、校内研主任、ESDマネジメントリーダー、総合学習担当者が中心となり、カリキュラムマネジメントに取り組むことができた。

○今年度、ESDティーチャー認証プログラムに4名の教員が参加し、スペシャリスト1名、マスター1名、ティーチャー2名が認証の申請を提出している。各学年におけるESDを組織的に推進していくためのリーダーとしての活躍がこれからも期待できる。校内教職員のESDへの理解の醸成とともにホールスクールアプローチによるESD推進の基盤を整えることができてきている。

○地域防災担当者（地域住民）、市危機管理課、自衛隊、商業施設職員、大学生サークル等、多様なステークホルダーが関わる教育活動の推進は、学校教育が教職員のみで構築する従来型の枠を超え、地域社会・民間団体、行政機関など多様な主体が学校に参画し、こどもたちの学びを共同で支えるという新たな視点をもつことができた。

○学校全体でESDに取り組むことで、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）が機能的に役割を果たし、地域と学校の協働体制の構築につながった。協議会での熟議や助言を通して、防災学習の方向性や地域との連携方策が明確になり、学校としての意思決定が円滑に進んだ。また、地域コーディネーターが、学校と地域をつなぐ重要な役割として活躍し、多様な地域人材や機関との連携調整を担ったことで、防災学習の実施に必要な講師・体験機会等の確保・充実がなされ、生徒にとって質の高い学びを実現する基盤づくりに大きく貢献した。

#### 【課題（今後の展望）】

○これまでの日本における様々な震災をはじめ、世界においても大災害が頻発しており、世界の持続可能な開発を進めるうえで、災害被害の軽減や災害に係る協力体制の構築は国際社会の重要な課題である。このことを本校の防災学習とつなげながら、生徒が“地球市民”として、防災を語れる視点を育むことが重要であると考え。地域の防災課題の理解にとどまらず、日本や世界の防災の取組との比較・関連づけを行う学習をさらに取り入れ、視野を広げさせていきたい。

○今年度、学校運営協議会や地域コーディネーターを軸に、地域・大学・行政・企業等、多様な関係団体が本校の防災学習に関わり、充実した学びのインプットが実現した。しかし、これらはあくまでも学習の基礎となる段階であり、今後さらに踏み込み、「地域を巻き込んだ広域避難の学習」「福祉施設との協働による災害弱者支援の学習」「国際交流協会・団体との連携による外国人観光客・留学生支援の学習」等、学校を超えて地域全体を巻き込む“面”の学びへと発展させていくことが大切であると考え。地域社会の多様性や実際の災害対応を踏まえた学びを計画的に取り入れ、「地域とともにある学校」の具現化をさらに推進していきたい。

○今年度、校内研究テーマを「探究的学習により意見交流を重ねて“こうどう”・発信する生徒の育成—ESDを中心とした総合的な学習の時間と教科の学習との往還を強化した取組—」として、ESDの視点を兼ね備えた教職員の資質向上に向けて研修を重ねるとともに、総合学習と教科往還のカリキュラムマネジメントに取り組んできた。次年度、さらに教員がESDの視点を明確にする中でより多くの教育実践に取り組み、学校全体がESDを軸に学びを構築できる“ホールスクールアプローチ”をさらに確かなものにしていきたい。



現在の学年終了時に目指す姿

防災学習を通して、地域への関心と郷土愛を深め、生徒が「自分たちのまちを守る一員」としての意識を高めるとともに、将来にわたって地域社会に貢献しようとする主体的な態度を身につけることがで

自分の考えを相手にわかりやすく伝えるためにどんな工夫をするといいのだろう？

国語科「根拠を明確にして書こう」

災害時に命を守るためには、正確な情報を整理し、わかりやすく伝える力が不可欠である。防災学習で得た知識や地域調査の結果をもとに、避難所運営や防災マップ作成に関する説明文や協力依頼文を作成する。また、大学生や地域住民との交流で得た気づきをレポートにまとめ、発表原稿や啓発ポスターのキャプションを考える活動を通して、目的に応じた文章構成や表現の工夫を学ばせたい。

社会科(地理的分野)「地域調査の手法」

野外調査を通して、景観や地図の読み取りから、身近な地域の特色を考察したり、地域作りや防災など地域の発展のために構想したりする資質・能力の基礎を養う。校区の巡検を行う中で、「自然地形と防災」「歴史的背景」「地域の経済と町並み」の視点で景観を観察し、身近な地域の地域的特色を概観させたい。

教室で学ぶだけでなく、実際に見て回ることによって気づくこと、感じるものがたくさんあるなあ。

総合的な学習の時間「老上中防災教育 Oikami Bousai Education(OBE)」—みんなで創る安全・安心なまち OIKAMI—

○主に養いたいESDの資質・能力  
多面的・総合的に考える力

地域の人たちが協力して防災に取り組むことは、自分たちも地域から大切にされている存在だと考えることができる。

他者と協力する態度

「自分がどうせやっても」と思わず、多くの人を巻き込みながら行動することができる。

進んで参加する態度

自分がよいと思った防災活動は積極的に行動にうつすことができる。

○主に育てたいESDの価値観

世代間の公正

安全・安心な地域環境は、次の世代へきちんと引き継いでいく責任が今の時代を生きる私たちにはある。

世代内の公正

安全・安心で住みやすい地域社会を、みんなが協力して開発していく必要がある。

総合的な学習の時間「障がい者理解」

だれもが安心して過ごせる社会には、困っている人に気づき、支えあう姿勢が欠かせない。障がいのある人の立場を理解し、共に助け合う心を大切にできる意識を醸成させたい。

考動・幸動する姿勢が大切！！

日本列島は4つのプレートが集まっているから地震が多いんだ、日頃から防災に備えることは大切なこと！

理科「ゆれる大地」

日本列島で巨大な地震が起こりやすい理由について、地震の発生メカニズムや揺れの性質から学ぶ。また、液状化や土砂災害などの現象を科学的に理解する。災害時に起こる環境変化や衛生管理の重要性を考え、科学的根拠に基づいた防災対策を検討させたい。

技術・家庭科「身近な素材で防災グッズを工夫」

災害時に役立つ防災グッズを、身近な素材を使って制作する活動を通して、創意工夫の力を育てる。ロープワークや簡易調理などの生活技術を学び、家庭での備えや情報伝達の方法を考えさせたい。

美術科「デザインの世界」

地域の危険箇所や避難経路をわかりやすく示す防災マップをデザインする。色や記号の使い方、レイアウトの工夫を通して、情報を効果的に伝える力を育てる。防災啓発ポスターの制作を通じて、地域への発信力を高めたい。

身近にあるものを使って工夫するという発想が大切。「分かりやすい」「見やすい」を創造するっておもしろい。